

24時間ワンオペ育児「もう限界」

保育園などに通えなかった5歳

こぼれ落ちる子どもたち



②

態だった。いわゆる「無園児」だ。見ず知らずの大都市・東京に昨年、地方から引っ越してきた。頼れる家族、友人はゼロ。離婚して父親はいない。

「キリちゃん」。みんなは、わたしをそう呼ぶの。「プリキユア」が好き。

日曜日の朝8時30分からね、テレビで見てるんだよ。最近、うれしいことがあったの。「おかあさんがね、怒らなくなったの」

記者に話しかけてきた、キリちゃんが急に泣き始めた。「思い出しちゃったんだね。ごめんね」。40代の母親が抱きしめ、頭をなでる。

昨年8月から2カ月間、5歳だったキリちゃんは保育園にも、幼稚園にも、こども園にも通っていない状態

「こんなママでごめんね。もう死んじゃいたい」今の部屋で暮らしてはじめて間もない昨年8月、母親はそう感じていた。キリちゃん以外とは誰も話さない毎日。孤立し追い詰められていた。

母親は幼少期から両親の暴力を受けた。蹴られて家の2階の階段から転落した。「女の子はいらなかつたのに」と言われたこともあった。

キリちゃんを産む前の20代で母親は、うつ病と診断された。自分の親の暴力が、自分の娘に向かうかも。そう考えた母親は故郷を離れた。

昨年8月から2カ月間、5歳だったキリちゃんは保育園にも、幼稚園にも、こども園にも通っていない状態



母親に絵本を読んでもらうキリちゃん
=1月15日、東京都内

より良い仕事求め上京した母 うつ病抱え孤立

一人で子育てをしながら、少しでも条件の良い仕事を、と求めて短期間に数回、転居。新たに頼れる知人をつくりようもない。

そして、たどり着いた東京の今の部屋。将来への不安と、「あれも、これもやらなきゃ」で頭はいっぱいになっていった。

天井近くまで引っ越しの段ボールは積み上がったまま。キリちゃんのご飯の用意。お風呂にも入れなくちゃ。仕事だって見つけないと……。

保育園どうしよう……。何から何まで、自力でやらなきゃ。どれから手をつければいいの。途方に暮れ

た。メンタルの不調を抱えながら、子どもを自転車の後ろに乗せて役所やハローワークに通うのは、しんどい。かと言って、キリちゃんだけを自宅に一人にはできない。

「お困りごとはないですか」。役所の窓口でその声を掛けられることも、職員が訪ねてくることもなかった。

「子どもとずっと家に2人きり。もう限界」。24時間、母子だけの毎日のなか母親は思うようになった。

昨年9月ごろ、ストレスの矛先を、キリちゃんに向けてしまつこともあった。「ママ、おやつ」「ごはん、まだ?」。ストレスが爆発した。「これ、食べときゃいいじゃん!」。2人この日も2人で食卓を囲んだ。

0～5歳で保育園、こども園、幼稚園のどこにも通っていない子どもの数は187万人(2019年度)。該当する年齢の人口から幼稚園や保育園などに通う子どもの数を差し引いて国が推計した。

年齢別にみると、97%(181.6万人)は0～2歳。両親どちらかが働いていない家庭が多いとみられる。

保育園が無償化され、幼稚園の利用もできる3～5歳では、5.4万人に急減する。それだけに、こども家庭庁の幹部は「3歳以降でどこにも通っていないのは、孤立育児の心配が増す」と話す。

東京都江戸川区は、どの園にも通っていない子どもがいる家庭を対象に、区内の子育て経験者が訪問し、子育ての悩み相談に乗る事業に取り組む。全国どの自治体でも行う事業ではない。

「無園児」という状態は特

「3歳以降でどこにも通っていないのは、孤立育児の心配が増す」と話す。

東京都江戸川区は、どの園にも通っていない子どもがいる家庭を対象に、区内の子育て経験者が訪問し、子育ての悩み相談に乗る事業に取り組む。全国どの自治体でも行う事業ではない。

「無園児」という状態は特

東京都江戸川区は、どの園にも通っていない子どもがいる家庭を対象に、区内の子育て経験者が訪問し、子育ての悩み相談に乗る事業に取り組む。全国どの自治体でも行う事業ではない。

「無園児」という状態は特

東京都江戸川区は、どの園にも通っていない子どもがいる家庭を対象に、区内の子育て経験者が訪問し、子育ての悩み相談に乗る事業に取り組む。全国どの自治体でも行う事業ではない。

「無園児」という状態は特

東京都江戸川区は、どの園にも通っていない子どもがいる家庭を対象に、区内の子育て経験者が訪問し、子育ての悩み相談に乗る事業に取り組む。全国どの自治体でも行う事業ではない。

3～5歳の無園児5.4万人 支援に地域差

妊娠届を出して、母子健康手帳をもらった瞬間から保健師や助産師といった専門家が育児への助言をしてくれる。一部の自治体で取り組んでいるが、「子育て支援は地域格差が大きい。少子化の時代、ベースとして必要な部分は全国共通にしてほしい」と高祖さんは言う。

(久永隆一)